

◎この山、岩湧山は 30 歳代の頃登ったような気がする、と思い出しているが、臆げにその山の名前が出てくるだけで、誰と行ったのか、交通機関は何だったのか全く見当がつかない。上に登って道しるべの標識を見ると、二上・葛城から紀見峠を超えここに至る道“ダイヤモンドトレール”のようだ。

ダイヤモンドトレールと聞くと身障者の人を担ぎ上げる会、その正式名称も忘れてしまったが、30 歳代の当時桜の宮の事務所にも何度か通い、たくさん知り合いもできたが今は没交渉だ。その会の方と登ったのかも知らない。その会では、ダイヤモンドトレール“二上山”から“紀見峠”ぐらいまでを歩いた、8 時間ぐらいだったかな。“金剛山”も登ったことがある。バスで“能郷白山”にも行った。圧巻だったのは“木曽駒ヶ岳”の話だ。木曽駒ヶ岳登山では事前準備で何回も集合して、ほえ籠のようなものを手造りし、その中にひとりを入れてもらい四人で担ぐという段取りだった。ほえ籠造り、試運転、若いころで労も惜しまずワイワイ造って、担いで楽しんだ。当日は事故もなく無事に何人かでてっぺんに上がり、小屋で一泊した思い出がある。皆さんと酒も飲んだ、「あんまり ビールを飲むと 小便が近くなる 迷惑かけるから・・・」フラリぐらいが歩けないのでトイレには車いすに乗らなければならない。「いいじゃないの のものも トイレぐらい 連れて行く」なんて調子で楽しんでいたが、彼ら彼女らはまだ健在だろうか。

◎「近辺にも ススキの名所がいくつかあるが わたしは ここのススキが 最高だと思う」同道した小林さんの言葉に期待しつつ、トイレの横を通り抜け山頂を見ると、ポコリ大きな兜のような形、そこがぎっしりススキで覆われている。「おおお これはすごい 美しい」思わず叫びたくなる感動、ポコリの山肌に白い綿毛のススキが風に揺られ右に左に、圧巻である。今年は暑い夏が続いていたが、9 月中下旬になったころ比良山に登っている時尾根道になん本かのススキの白い穂を見つけ、「おお やっとススキの季節」とほっとしてススキを愛でたのが 2 か月前。今回はこの圧巻のススキを見て、ススキの感動収めである。

◎ススキということで先日来読んでいた古事記にススキの話が出ていたことを思い出す。ススキはイネ科の植物で葦よし・芦あし・茅かや、と呼ばれ、昔は“茅葺（かやぶき）屋根”や家畜の飼料になる“茅場”などがあったらしい。日の当たる乾燥地帯を好むらしく高原や山の中腹でよく見かける。古事記では葦がいっぱい茂った国というが、これは謎である、葦の価値観がわからない。とここまで書いて、「こらあ違う 古事記の葦は水辺の葦だ 山のススキ話じゃなさそう」と気づいた。

神話時代、葦の葉が風にそよぐ、まだ秩序が定まっていない未開の地。青々と葦（あし）が茂る台地、いつも行く安威川にも淀川にもたくさん生えている。もっともススキも水辺にも生えている。「こらあ こんがらがるねえ」葦やススキが稲に変身していくのかな、変身しなくても水と緑が豊かなことはいいことだということにしておこう。同じイネ科なのにススキは乾燥地を、葦と稲は湿地を好む、ね。

古事記：豊葦原の千秋長五百秋の水穂国：とよあしはら の ちあきながいおあき の みずほのくに
千五長五百秋：ちあきながいおあき：1500 年：限りなく長い年月：永遠：豊かで永遠に穀物が実る国
水穂：稲穂

◎この山行は、2 年前から参加している山の会の忘年会で、河内長野駅前の開館を借りて 1 泊した。こぎれいな和食が出た、少ない目に美味しく料理がしてある、酒を飲みおいに楽しんだ。いまだに宴会酒となると俄然飲みたいスイッチが入り最後まで杯を傾けた。ビール、酒、焼酎、ワイン、全部いただいた。

◎岩湧山の急登は階段ばかりでフーフーである。都市近郊の里山なので登山口はいくつもあるらしいが、前回の登山は、登ったあとでも、道や風景のことは全く記憶にない。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎前回の岩湧山のススキの話から、「古事記のどこに ススキの話があったのか な」と、ページをめくった。

◎先生：オホクニヌシがこの葦原の中つ国をお治めになって、どこくらいの時が経ったか。神は数える年など持たぬから、その長さはよくわからないが、葦原の中つ国はにぎやかに、そして穏やかな暮らしが長く長く続いておった。

◎ところが、ある時、高天が原を治めるアマテラスが、

「豊葦原の千秋の長五百秋（ながいほあき）の水穂の国は 我が御子 マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミの総（す）べ治める国でありますぞ」

◎先生：それにしてもこのアマテラスの発言はきわめて一方的なものである。そこに国家の側の支配観念や覇権主義的な思考回路がよく表れている。<オホクニヌシが葦原の中つ国を治めているではないか>

◎先生そうおっしゃるが、国家にしる個人にしる、強いものが弱いものを支配していくという流れは今も昔も変わらないのではと思う。こういう考え方が、自然というか、そらあ不自然で身勝手すぎるというか、人それぞれだね。弱いという立場の人にとって、襲ってくる、支配してくる、盗みにくる、黙って見ているしかしかたがない、だって弱いんだもん、弱いでは情けないけど、現実だね。

◎オレも少し前までは、「大和政権が当然だ」「日本海側なんて 裏日本 しょせん裏じゃ」なんて思っていたが、「縄文の時代も 古事記の時代も 近世までは 日本海側の街々が 賑わっていた」とは知らなかった。華のお江戸とはいえ、新潟県が一番の人口だった時期もあったらしい。

◎葦原の中つ国：この言葉が出てくるのは、古事記の中でもっと前にもあった。

オオクニヌシがまだオホナムヂと呼ばれていた時もことだった。

オオクニヌシは名前をいくつか持っている。スサノヲの六世の孫と位置づけされている。

大国主神：オオクニヌシ：偉大なる国の主

◎若いオホクニヌシには、80 人余りの兄弟がいた。八十の神が稲羽のヤガミヒメを娶りたいと競い合った。

八十の神々が、気多の岬で、皮を剥がれ赤裸のウサギを見つけ、「海水に浸かって 干せば治る」と言った。

ウサギは、塩が乾き、ますますひどいことになっていった。

オホクニヌシが、「真水で洗い ガマの穂の上に 寝ていれば治る」と告げた。

八十の神々に妻問いを受けたヤガミヒメは、「オホナムジ（オホクニヌシ）様に嫁ぎたい」と言った。

そのことから八十の神々のオホナムジ（オホクニヌシ）に対する襲撃が始まった。

何度か死にかけた末、スサノヲの娘：スセリビメと結ばれた。

◎スサノヲは、葦原の中つ国につながる黄泉の平坂まで追って行って、ようようはるか遠くに二人の姿を望み見て、オホナムジに呼びかけた。

そのお前の持っている、生太刀と生弓矢とをもって、そなたの腹違いの兄どもや弟どもを、坂の尾根まで追い詰め、また、河の瀬までも追い払い、おのれが葦原の中つ国を総べ治めてオホクニヌシとなり、また、ウツシクニタマ（別名）となりて、そこにいる我が娘スセリビメを正妻として、宇迦の山の麓に、土深く掘り下げて磐根にとどくまで宮柱を太ぶとと突き立て、高天が原に届くまでに屋の上のヒギを高々と聳やかして住まうのだ、この奴め。

小野篁依情助西三条大臣語 20-45<おののたかむら なさけによりて さいさむでうの おとどをたすくる>

◎ 今は昔、小野篁（たかむら）という人がおった。＜中略＞

西三条大臣（さいさんじょうのおとど）は重い病氣にかかり、数日のうちにお亡くなりになった。と同時に、閻魔王の使いに捕縛されて閻魔王宮に連れていかれ、裁判を受けることになった。

見れば、閻魔王宮に仕える臣下がずらり居並んでいる中に、小野篁が混じっている。

大臣はこれを見て、「これはどういうことであろうか」と不思議に思っていると、篁が笏を手にして王に申し上げる。「この日本の大臣は 心正しく 人に対して親切なものであります この度の罪はわたしに免じてお許しくさいますよう」

これを聞いた王は、「それは非常に難しいことだが そなたがたつての願いゆえに許してつかわそう」とおっしゃった。

そこで篁は、捕縛したものに向かい、「早速連れて帰りなさい」と命じたので、連れ帰った。

と思うや大臣は蘇生した。

そのご、病氣はしだいに良くなり、数か月経ったが、あの冥途でのことが不思議でならない。だが、誰にも話さず、篁にもまったく尋ねなかった。

◎先日、京都に住まいする山田さんが、「いい店 みつけた 3時からの 予約」ということで出かけた。目的の店は五条通の傍なので、電車を降りて歩いていこうと、阪急電車の京都河原町駅、一番前の改札口で待ち合わせをした。

「もう山をやめた人から この靴 どなたか履けるなら」と持ってきてくれた。「おお 冬用 登山靴 ずっしり 重い ちょっと 河原の ベンチでも 履いてみますね」階段を上り賀茂川を渡り近くのベンチに腰掛け靴を履いた。靴が来ることがわかっていたので、持って帰るのにザックを持って行こうかと考えた末、山靴用のぶ厚い靴下にサンダルで電車に乗ってやってきた。帰りはその靴を履いてサンダルをカバンに入れればいいという算段でやってきた。「むむむ 小さい 小さすぎる」「靴の中に 足は 入るが ジンジンする まったく歩けない」なかなか物はいいいモノできれいに手入れされている。「残念 でも 要らなかったら 要る人探してみますよ」「要らない」ということで靴のカバンをもって五条の方に歩き出した。

◎「京都に 住んでいるけど 京都のことは あまり 知らない」「ははは 京都に 住んでる人で 嵐山に 行ったことがない人 いますよ」「ははは」賀茂川の東側を歩きながら、「地獄に通じる 井戸が あるんだってそれを見たい」という。フ〜と聞いていたが、「あ それ 今昔物語のなかで 読んだような」と思い出した。歩きながら小さなお寺に入った。小さいとは、京都の有名寺院はバカでかい門があり長々続く屋根付き堀があり、その中にいくつもの建造物がある。そういう寺から比べ、門もあるや否や、建造物もひとつふたつ、「井戸なんて ないね」と帰りかけたが、坊さんが軽自動車で帰ってきたので聞くと、「井戸は 開帳の日が決まっていて 今日ダメ あそこの穴から 覗けます」ということだった。

◎主人公は小野篁、妹子・道風・小町が一族にいた。

◎小野篁：学者で詩人で政治家であった。実在の人物で、入間は朝廷で官吏を、夜間は冥府において閻魔王の下で裁判の補佐をしていたという伝説がある。

◎嵯峨天皇が、子の字を 12 並べ、なんと読むと問うと、篁は、「猫の子子猫 獅子の子の子獅子」と読んだ。

◎六道珍皇寺：六道の辻（この世とあの世の境目だとか）ここから西がこの世、東があの世、東山の鳥辺野（清水寺のあたり）と呼ばれ、鳥葬の地であった。傍に轆轤という地名があり髑髏から来ているとか。

飛驒国猿神止生賛語 26-8<ひだのくにの さるかみの いけにへを とむる こと>

◎この話は前にも読んだが、何度読んでも面白い。飛驒の国の隠里。回国修行僧がこの隠里に紛れ込んだ。

◎今は昔、仏教修行をして歩く僧がおった。所定めず行脚しているうちに、飛驒の国まで行った。

◎飛驒国：岐阜県の北部で県の40%ぐらい、高山市・飛驒市・下呂市・白川村。飛驒高山を中心に、北アルプス飛驒山脈の麓で自然豊かな所。

◎僧は山の中で道に迷い、いつしか道が途絶え、大きな滝が簾をかけたように幅広く高所から落ちているところに行きあたった。引き返そうにも道がわからない。進もうにも、手を立て掛けたような断崖が百丈も二百丈も聳えていて、よじ登る術もないので、ただ、仏様お助けくださいと念じていると、うしろの方で人の足音。<中略>男に道を聞いたが答えようともせず、この滝の方に歩いていき、滝の中に踊り入って見えなくなった。僧は、あれは鬼か、鬼なら喰われても仕方がない、と同じように滝の中に踊り入った。

◎普通の人間世界と、異次元の世界。今の岐阜県の山間部、飛驒の国のどこかに、もうひとつの人の世界がある。その世界に飛び込んだ僧が、魚肉の美味しいものを喰い、可愛い嫁をもらい、いい服を着て、修行僧から普通の幸せなあんちゃんに変身していく。最初に並んだご馳走に接するところが面白い。

◎「まず 食事を早く差し上げよ」というと食事を持ってきた。見れば、魚や鳥を見事に料理してある。僧これを見て箸をつけずにいると、この浅黄の男が出てきて、「なぜこれを召しあがらないのですか」という。僧が、「幼く法師になって以来 まだこのようなものを食べたことがないので こうして眺めているのです」というと、浅黄の男が、「なるほど それはごもつともなことです だが 今こうしておいでになったからには これを上がらないわけにはまいりますまい」「わたしにはかわいがっている 娘が一人おります 妻にしていただこうと思っております」「今日から 髪も伸ばしてください」

僧は仏がどのように思召すかと思ひながらも、魚や鳥をすっかり食べてしまった。

そのあと、夜に入り、年のころ二十歳ほどの、顔も姿も美しく、きれいに着飾った女をこの家の主人が僧の前に差し出し、「これを差し上げます 今日から わたしがかわいがると同様 かわいがってください」

僧は言う甲斐もなく、女に接してしまった。

◎僧が俗人に還ることを還俗という。幼いころから修行一筋の僧が、あっさり俗にまみれてしまう、ま、いいじゃないですか。今も昔も、本人の生き方だもんね。

同年輩の姉さん方の井戸端会話、「あのひとは おかしいよ 旦那の命日にも 坊さん呼ばんと」「そらあ おかしいねえ 旦那が一生懸命 家族を支えてきたのに その旦那のこと ほったらかしにして」余程昭和的な考え方なのか、葬式以来坊さんに参ってもらわれない方に対して、二人でおおいに非難している。我が家も半世紀前に母親が亡くなり、毎月のように坊さんが拝みに来ていた。今から考えると無駄な出費を永らくしていたものだが、お寺側からすれば毎月の上がり、少ない金額とはいえ数があれば収入の一部になったはず。そんな毎月の、毎年の行事が今の時代になって薄れてきて、「もう お参りに来てもらわなくても・・・」「もう お寺へのお金をお渡ししません」なんて人々が増えてきていると思う。オレもお寺への出費は親父の葬式を最後に無くなっている。寺にすれば、「もうちょっと なんとか してくれないか」と請求書を出したいところだろうが、どこのお寺も経営がしんどくなってきているらしい。

◎言うておくけど、「オレは 直行でいい 一晚何処かで寝て 焼いてくれ 骨は 持ち帰らず 墓もいらん」

◎こうして、夫婦として月日を過ごすことになったが、その楽しさはたえようもない。着物は着たいものを着させてくれる。食物は何でも食べさせてくれるので、以前とは比べ物にならず、見違えるように太ってしまった。髪も髻（もとどり）に取れるほど伸びたので、髪を結い上げ、烏帽子をつけた姿はなかなかの男っぷりである。娘もこの夫を片時も離れがたく思い、夫も女に愛情の深さを知るにつけ愛しさが募り、夜昼、起き伏し、ともに離れず暮らしているうち、いつしか八か月ほどが過ぎた。<次回に続く>

飛驒国猿神止生贅語 26-8<ひだのくにの さるかみの いけにへを とむる こと>

◎<前回の続き>・・・いつしか八か月ほどが過ぎた。ところがそのころから、この妻の顔色が変わり、ひどく悲しんでいる様子である。この家の主人は前にも増してよく面倒を見てくれ、「男は肉がつき肥えているのがいいですよ お太りなされ」と言って、日に何度かモノを食べさせるので、ますます太っていく。それにつれてこの妻はさめざめ泣く。夫が不思議に思い、「なにを嘆いておられるのじゃ さっぱり訳がわからぬ」と言ったが、妻は、「ただ何となく心細く思われるのです」といって、それにつけてもいよいよ泣くので、夫は訳もわからず怪しい気がするものの、人に聞くべきこともなく、そのまま過ごしているうち、客がやって来て、この家の主人と会った。互いに話しをしているのを、そっと立ち聞きすると、客が、「いい塩梅に思いもよらぬ人を手に入れなさって 娘御が無事になられたことを さぞやうれしくお思いでしょう」などというと、主人は「そのことですよ もしこの人を手に入れなかったなら 今頃どんな気持ちでいましたことやら」という。

◎食べ物をすぐに持ってきてくれる、それを食べながら、妻の思い嘆くさまがわからない、客が言ったことも恐ろしい気がする、妻をなだめすかして尋ねてみたが、妻は何か言いたげな顔つきながら何も言わない。そうしているうちに、この里の人々がなにやら準備に追われている様子で、家ごとに大騒ぎして御馳走の用意を始める。妻の泣き悲しむ様も日増しに募っていく。

◎夫は妻に、「泣くにつけ笑うにつけ どんなことがあっても 決して隠し事などなさるまいと 思っていました が こんなに隠し事をなさるとは情けない ことですね」と恨み泣きをすると、妻も涙を落とし、妻は泣く泣く話し始めた。

◎「この国には たいそう恐ろしいことがあるのです この国には靈験を現し給う神様が おありになるのですが その神様は 人を生贄として食べるのです あなたがここにおいでになった時、私の家に来て欲しい わたしの家に来て欲しい さかんに要求したのは この生贄にしようがためだったのです」

「毎年 ひとりずつ順に生贄を出すのです あなたがお出にならなかつたら いとしの我が子でも生贄に出すのです わたしが神様に食べられることでしょう」

「あなたに代わって わたしが生贄に出ようと思います」

◎男は妻から、生贄の手順を聞くと、神様は猿の姿をしているという。男は妻に刀を探してもってくるように言った。

◎男はそれからよく食べいっそう元気になり当日を迎えた。この男の沐浴をさせ、衣装をきちんと着せ、髪をとかせ、毛をきれいになでつけ、舅と共に馬に乗って出かけた。

◎さて、男が行き着いてみると、山の中に大きな祠がある。玉垣が物々しく広々とめぐらしてあった。その前にご馳走を多く供え、数えきれぬほどに人が居並んでいる。そこに一段と高く座をしつらえ、その男を座らせ食べ物を進める。他のモノたちもみな食ったり、飲んだりして舞い遊び、それが終わるとこの男を呼び出して裸にし、髪をとかせ、「絶対に動くな 口をきくな」と言い含め、まな板の上に寝かせ、まな板の四隅に櫛を立て、それに注連縄や御幣を掛けめぐらし、玉垣の中に据え、扉を閉めてひとり残らず帰っていった。

◎やがて祠の扉がぎいーと鳴って開く。それを聞いたとたん背筋が寒くなったが、人間ほどもある猿が現れキャッキャという。続いて、銀の歯を並べたような歯の一段と大きい堂々とした奴が現れたが、これもまた猿だったのだと思うと気が楽になった。一匹の猿が生贄の男を刀で切ろうとする時、男は股に挟んだ刀を手取るや、サッと立ち上がり、一の祠の猿めがけて走りかかると、猿はあおのけざまに倒れた。男は猿にのしかかって踏みつけ、刀を突きたて、「貴様が神か」というと、猿は手を合わせ拝む。ほかの猿どももこれを見て一匹残らず逃げ去り、樹に登ってキャッキャ騒ぐ。

「やい貴様は 猿だったのだな 神だと偽り 毎年人を喰うなど とんでもないことではないか」

男は猿を縛り上げ、祠を焼き、猿どもを引き連れ家に戻った。

男はこの里の長者となり、妻と睦まじく暮らした。

◎雪が降った、雪の比良に行きたいがひとりで大丈夫か、今回は近所のポンポン山にするか、迷った末、雪を選んだ。一年前もあったが、釈迦岳直下で時間切れ、引き返した、ま、気軽に行って引き返すのもよしかな、と比良に行くことにした。

◎6時半 JR 茨木発に乗ろうと5時に起きた。前の日は誕生日だったので、すき焼きで飲んだ、いっぱい機嫌で眠剤を飲んで5時まで目も覚めずぐっすり眠れた。12月に入って飲む機会が増え身体までが酒に慣れ、毎日ちょっと飲みたいなんてコップに注いでいる、気をつけなくっちゃ。

◎8時前に北小松駅に降りたのはオレひとり、トイレ、靴紐、スパッツ、登山届投函、ダウンを脱ぎ出発した。シャツ3枚と上衣で歩き始めた。車窓からでは比良の尾根筋はまっ白い雪に覆われているが、少し下の方は黒い緑色、どの程度の積雪かはわからない。乗っている間は、「いい天気だ 登山日和だ」と喜んでいた。

◎一本目を歩きながら、今日の体調はと自問、良くも悪くもないが止まることなくゆっくり進めた。駅を出て涼峠まで1時間ちょい、水を飲みパンを齧った。空はうすぽんやり曇っている、今日は晴れのはずだが。歩きながら、「あれれ 枝に 幹に ザックが引っかかる ザック煙突でもないのに」と不思議がっていたが、「おお ピッケルが ザックから顔を出している 忘れてた」「ピッケルを出し 背中に差し込まねば」この方法は澤山さんに教えてもらった、ザックと背中の中に差し込んで歩くのだ、邪魔にならずにいいのだ。

◎二本目はヤケ山を通り越して急登の手前まで歩くようにしている。この配分だと4本で釈迦岳につける算段である。上着をザックに入れ秋のスタイルで登っている。このあたりの地面はたっぷり濡れている、雨上がりのようで雪は無い、雪がどのあたりから現れるのか、この雰囲気では簡単に登っていけそうな気がする。

◎大砲の音か、高島トレイルではよく耳にしたが比良では聞いたことがない、と先程から、「ずドド～」と響く音がする。あれまただ。え、雷か。10分おきぐらいに腹に響く音が聞こえる。まさか、大砲の音で熊を追っているのかな、もしそれなら熊が山に逃げてきたらこれまた怖い。あの音はなんだったのかな？

◎エンヤコラ登り始めた。今、饅頭を喰った、昨日おやつにと買った小ぶりの饅頭が上品で美味い。もうこのあたりは琵琶湖が見えるはずだか白い雲が目の前を流れ視界が悪い。しばらく登っていると雪が増えだした、「おお滑るね、こらあ アイゼンですか」今のアイゼンは簡単装着、「ワンタッチ」という触れ込みで簡単に着けられる。ピッケルを杖がわりに登っていく。雪はまだまだ薄っぺらく、「あれが 多分 登山道 カモ」とわかるところがいくつもある。

◎涼峠でオレを抜かし行ったあんちゃんが降りてきたので、「なんで もう帰るの」と聞くと、「雪が多くて 登れません」という。「オレは行くよ 超えて 比良駅まで歩くよ」「道具 もってないし」雪の季節の比良に、スパッツ、アイゼン、ワカン、それらを持ってこないはいけないね。てなことで雪が見えだしたところから踏み跡はなく、ラッセルほどではないにしろ白い雪を踏んで一歩ずつ進んだ。

◎11:30 ヤケオ山到着。ここまで来ればあと1時間もかからずに釈迦岳につける、飯は釈迦岳で食べることにしてまずは写真。雪の白と空の青、これがいいんじゃない。ここまで登ると晴れの天気になってきた、下の方に雲がかかっている。雪の付いた枝や草を触り、地面の雪に触れていると、毛糸の手袋が濡れてきたので、防寒防水手袋をはめた。これはいい、なにを触っても手袋の表面は濡れているが中はまったく濡れてこない、快適である。前回藪こき山の時に、園芸用手袋をして快適だったが、雪でもいいかもしれない、試さねば。

◎12:30 釈迦岳。雪の時は腰かける敷物があるねえ。忘れてきたので雨具を敷いて座ったが快適には程遠い。テルモスの茶はまだ熱すぎて飲めない、水を飲み手作り弁当を食べた。雪はさほど深くない、20センチか30センチぐらいの積もりよう。陽が照り暖かいので枝々に雪は付いていない。それでも今季初めての雪山、うれしい限りである。

◎3時にリフト駅まで下りてきた。林道歩きを入れ8時間の山行でした。6時前に帰り風呂のあとまた飲んだ。

◎そうだ、今日は転んだ。下る途中で落ち葉の積もったあたりを踏んで、ズルズルのスッテン、右の足が1メートルほど滑り、おまけに左足が根っこに挟まった、おっととであった。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎こぼればなし：スクナビコナ；カムムスヒの子

◎古事記の中に出てくる神様の数：国学院大学によると 338 柱

◎オレ：先生の感化を受け、出雲神話がなかなか楽しい。記紀というのは天皇家の歴史書という触れ込みながら、古事記は日本海側の出雲を華やかに現している。古代から語り、歌い伝えられた物語が集合して神話が作られていった。「違う時代と 違う場所 そんななんやかんやを集めて辻褄合わせてひとつに纏めた それが神話だ」と思えばいいじゃないの。

◎オホナムジとカムムスヒ：このペアーで語られる時は、オホクニヌシの別名オホナムジで語られる、この実態は、別人かも知れないが、それでもいいじゃないの。各地の風土記に、農耕の神、医療の神として語られる。

◎スクナビコナの母、カムムスヒとは、本の索引を見るに、古事記の中に何か所か登場する。

◎なんと最初の 3 番目に登場する。

天と地とがはじめて姿を見せた。その時、高天が原になり出た神の御名は、アメノミナカヌシ。

次にタカミムスヒ。次にカムムスヒが成り出た。

この三柱の神はみなひとり神（男でも女でもない）で、いつの間にやら姿を隠してしまわれた。

◎アマテラスによって、高天が原から追われたスサノヲが道中オホゲツヒメに食べ物を乞うた。ヒメは鼻、口、尻から美味しいものを取り出しもてなしたが、「なんと汚い」とスサノヲはオホゲツヒメを切り殺した。すると、その体から、蚕、稲、粟、小豆、麦、大豆が生まれた。

それを見ていた高天が原のカムムスヒが、これらもろもろの実のなる草の種をスサノヲに授けた。

◎八十の神々がヤガミヒメに妻問いをしたとき、「わたしは オホナムジ（オオクニニシ）様に嫁ぎたい」と聞き、八十の神々は、オホナムジを殺そうとした。焼けた岩に押しつぶされ死んでしまった。それを聞いた母親は、殺されたわが子を見て哭き悲しみすぐに、高天が原に飛び、カムムスヒにお願いしら、二人の神を遣わし、オホナムジを生き返らせた。

◎オホクニヌシが国譲りで、ヤマトに服従する制約の言葉の中に。

この、わが鑽れる火は、高天が原においては、カムムスヒの祖神様（おやがみ）が、ひときわ高くそびえて日に輝く新しい大殿に、・・・・・・・・

◎オホクニヌシ：葦原の中つ国の主となられたオホクニヌシが国造りにはげでいた時の話。

◎オホクニヌシが、出雲の美保の岬にいました時、波の穂の上を、アメノカガミ船に乗って、ヒムシの皮をそっくり剥いで、その剥いだ皮を衣に来てより来る神がいた。オホクニヌシがその名を問うたが何も答えず、共のモノに尋ねても、みな知らないという。

クエビコなら知っているのでは、と問うと、

「この方は カムムスヒの御子 スクナビコナ様に違いないのでは」という。

そこで、母親であるカムムスヒに申し上げると、

「この子は まことに我が子です 子たちの中で 私が 手の指の間から落としてしまった子です どうかオホクニヌシと兄弟として あなたの治める国を作りなさい」

そこでそれからは、オホクニヌシと、スクナビコナは二柱の神は共に並んで力を合わせ、この国を作り固めなされた。

あるとき、スクナビコナは、ふっと常世の国に渡ってしまわれた。

それで、スクナビコナの名と筋とを明らかにしたクエビコは、今でも山田のソホド（かかし）ということだ。この神は、足を歩ませることはできず、が、何から何まで世のことをお見通しの神なのだ。

◎なんじゃかや、おぬかしでも、もう年末だ、すぐに今年が終わる。とわいえまだ4日5日前、いつもと同じように年末も年始も生きていかにやいかん、ホホホ、あたりまえのことである。

オレは若いころから、正月、ゴールデンウィーク、お盆、この類は嫌いである。まわりがざわつき浮かれ出す、オレの方は仕事がなくなり暇になりますますます貧しくなるという寸法だった。

世間の人は、ボーナスだ、臨時手当だとお手盛りがあったらしいが、務めたことの無いオレには無縁の世界で、むしろ仕事なくなり収入が減るという算数であった。それだから言うが、65歳からお上からいただける年金は、月々入ってくる定期収入、これは泣けるほどありがたいね。ほほほ、月、4万円もだよ。

◎今日は寒い、「真冬並みの寒さ」と予報士が言うが、これまたおかしい表現で、「今 真冬じゃねえか」と突っ込みたくなる、温暖化で秋の爽やかな季節を感じないままに寒くなってきかたと思えば、11月の暖かさという日も続く。大阪は雪が降らないが、車で1時間2時間走れば雪の積もった山がある。先日来、「高見山の樹氷を見に行こう」とさかんに言っている。東吉野にあるその山は、車で2時間ちょっとでたどり着き、上に登ると雪の世界、交通にも便利だし山の雪もいいということで簡単に行けるいい場所である。この歳になるともっと大きな山、険しい山はひとりで行ってはやばいので、横に置いて。

◎一年先の展覧会、今描いている絵がオスでありポジであるとする、思い切ってメスを、大胆にネガをと考えひとつふたつ描いてみた、「おおこれはいい これで解決する これを待っていた」と続けて三つ四つやっているうちに、「さてよ ちょっと 違うかな これじゃ」と逡巡している。行きつ戻りつ迷走であるがこれはいはずだと思いなおすことにした。先日まで描いていた、「えい や〜」の袈裟懸けの絵、これがまた魅力的に見えてくる。世界は何もひとつでない、百も千もあるそんな中から、裏と表だけじゃなく、顔どうしの羅列を見て、「どれがいい これもすばらしい あれは魅力的だ」とおおいに受け入れ、「これはだめ あれはすかん」としかめ面もまたよし。ほんと人間とはかってなもので、オレとはわがまま極まりない駄作製造機、バカバカしくて話にもならないねと自愛する。

◎昼過ぎの河原、きれいな空だ。秋の空は真っ青で美しいというが、今日は違う。青い空の中に白い雲がホワリぽこぽこ、陽の光が強く雲を照らし、雲の裏側が灰色に踊る、そうグレーが白く黒く踊っている、爽やかでしかも力強い、天女が縦横無尽に縦横に前後に跳び走っているようで目が眩む。天女か天使か、羽があるのか簪に跨るのか、衣がふわり浮くのか、それは知らないけど走り回る、「おお そこのへぼえかきさん わたしを見てえ」なんてことがあればひっくり返るねえ、ほほほ。

◎先日話題になった、小野篁（たかむら）の親分の閻魔大王は、武骨な怖い親父で地の底で睨みつけている。仁王も魔界大王も同じようなもの。修業を積んだお聖人は空を飛ぶというが、禪に風を送って舞うのかな、やはり空を舞いオレを見してくれるのは女の天使がいいね、いくつになってもそりゃあ女だね、ほほほ。

◎ひんがしの 野にかげろひの 立つ見えて ふりかえみれば 月かたぶきぬ

東野炎立所見而反見為者月西渡：14文字の漢字で、よくも口語訳：賀茂真淵らしい。

この歌が思い出せなかったが、「そうだ 外出中でも スマホ君で 検査すればいい」と思いつき、「ひんがしの」と入れると早速出てくるじゃありませんか。柿本人麻呂の名句だけれど、解説を読むと天皇の新旧を陽炎やら月で表しているとか。ただ単に自然情景の美しさを詠んだものでないと解説氏は言うが、やだねえ、「お前は 宮廷画家か なら 召人か」

◎召人：上級貴族に仕え、性的関係のあった女性。舞楽のために召された人。歌会始で和歌を詠むように選ばれた人。